

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：32651

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16H05599

研究課題名（和文）急性期病院に入院する認知症高齢者ケースに対応した退院支援モデルの開発と妥当性検証

研究課題名（英文）Development and verification of a discharge support model for elderly patients with dementia in acute care hospitals

研究代表者

北 素子（Motoko, Kita）

東京慈恵会医科大学・医学部・教授

研究者番号：80349779

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,900,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者の急性期病院への入院から退院に至るプロセスを明らかにし、急性期病院における退院支援モデルを完成させることを目的とした。予定入院16例、緊急入院8例の合計24例が対象となった。各症例について、認知機能およびADLを含めた本人の状況と家族の状況に関するデータを、入院から退院、そして退院後1か月に至るまで縦断的に収集し、入院から退院後1か月の間に生じた問題とその要因を分析した。その結果、予定入院および緊急入院のケースに対応した退院支援モデルの要素が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが、その退院支援には困難が伴う。本研究の成果は認知症高齢者に特有の困難性に対応した退院支援モデルの開発に資するものであり、その意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the process from hospitalization to discharge of the elderly with dementia in an acute care hospital, and to complete a hospital discharge support model in an acute care hospital. A total of 24 patients, including 16 scheduled hospitalizations and 8 emergency hospitalizations, were included. For each case, data on the patient's situation and family situation, including cognitive function and ADL, were collected longitudinally from admission to discharge and up to 1 month after discharge. We analyzed the problems and their factors. As a result, we clarified the elements of the discharge support model for cases of planned hospitalization and emergency hospitalization.

研究分野：看護学

キーワード：認知症 急性期病院 退院支援 家族看護

## 1. 研究開始当初の背景

急性期病院では、治療を終えた患者は速やかに自宅、あるいはそれに準じた療養場所である施設等へ移行してゆくことが求められる。それへの対応として、短い入院期間の中でも、できる限り患者本人やその家族が治療を継続しつつ、うまく次の療養場所に適応してゆくことができるよう、部門・他職種連携の要となって困難ケースを集中的にサポートする退院支援部門が設置されるようになった。近年、認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが、その退院支援は困難ケースに挙げられる。欧米では退院支援(退院計画 Discharge planning)について多くの実証研究が積み重ねられている。その中で高齢者の退院支援に関する研究を展開する Naylor 等(1994,1990,2005,2007)は、認知症高齢者と家族に特有のニーズに合った支援モデルの必要性を指摘し、米国医療体制の文脈で高度実践看護師が中核を担うという高齢者と家族への支援モデルを提案している。

一方、我が国において認知症を有する高齢者の退院支援に関わる研究は、課題の重要性は認識されながらも、緒に就いたばかりで数は多くない。これまでのところ、研究として取り組まれたものとしては、認知症患者の専門病棟を対象とした入院期間長期化の要因(小川等 2007; 湯浅等 2007)や、地域医療支援病院を対象とした認知症を有する人と家族のニーズ(瀧上等 2011)を明らかにするものがある。それによれば、BPSD (Behavioral and Psychological Symptom of Dementia: 認知症の行動・心理症状)に代表される認知症特有の問題による高齢者自身の支援ニーズ、不安や介護負担といった家族の受け入れ困難状況、日々のケアや退院支援の一翼を担う看護師の困難状況が挙げられている。ここから、高齢者、家族、ケア提供者である看護師それぞれが困難を抱えていることがわかる。中でも看護師の抱える戸惑いや困難は、認知症高齢者や家族が抱える問題をより増幅させてしまい、かえって退院後の行き場を狭めてしまっているという可能性も指摘されている。

長期療養施設での認知症ケアを研究する Woods, Keady & Seddon(2008)は、より効果的な認知症ケアの実現のためには、認知症高齢者本人、家族へのアプローチを考えるだけでは不十分であり、ケア提供者を含めた3者それぞれの状況と関係性を捉えたそれぞれへのアプローチが必要であるとしている。このようなアプローチは、急性期医療の場におけるケアや退院支援においても同様に重要であると考えられるが、その検証やケアモデル開発は現在のところ皆無である。またその基礎となる研究も十分でない。

## 2. 研究の目的

本研究では5年間の研究期間内に入院から退院後のプロセスを定式化し、それを先行研究に統合することで、急性期病院における認知症高齢者とその家族、病棟看護師への支援を含む緊急入院と予定入院という2つのバージョンからなる退院支援モデルを開発し妥当性を検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

下記の段階を経て急性期病院における認知症高齢者ケースに対する退院支援モデルを完成させることとした。

**第1段階:** 急性期病院の外来および入院前患者情報収集部門において入院治療を選択した認知症高齢者の予定入院のケースを対象とし、意思決定プロセスを明らかにする。また入院

後、認知症高齢者が治療を完了するまでのプロセスを明らかにする。

対象は、急性期病院で 10 日以上入院治療を必要とする手術を受ける認知症高齢者症例（本人、家族、および入院に関わる看護師）とした。

第 2 段階：急性期病院に緊急入院した認知症高齢者のケースについて、家族が退院に向けて迎えるプロセスと、認知症高齢者が治療を完了し退院に向かうプロセスを明らかにする。各ケースについて、認知機能および ADL を含めた本人の状況と家族の状況に関するデータを、入院から退院、そして退院後 1 か月に至るまで縦断的に収集し、入院から退院後 1 か月の間に生じた問題とその要因を分析した。

#### 4 . 研究成果

予定入院 16 例、緊急入院 8 例の合計 24 例が対象となった。

(1) 予定入院 16 例のケースについて、途中辞退 1 例を除いた 15 例を分析対象とした。15 例の認知症の重症度は中等度 7 例、軽度 8 例であった。手術理由は変形性関節症および骨折 6 例、がん 8 例、その他 2 例であった。いずれも 2016 年度の診療報酬改定で導入された認知症ケア加算に基づいた認知症専門職チームが関わったケースであった。分析の結果、軽度～中等度の認知障害のある患者は、予定通りの入院期間で治療を終え、退院し、身体疾患による症状の改善とともに自宅での ADL を拡大しており、認知症専門職チーム介入の有効性が確認され、その関りの特性が明らかとなった。せん妄を発症した事例の分析、および退院後 BPSD が発生または悪化した事例の分析から、さらに追加する必要があるケアについて示唆が得られた。

(2) 緊急入院の症例を対象とした第 2 段階の調査では、研究協力者の部署異動や新型コロナウイルス感染症拡大によって途中でデータ収集が困難となり、再開の目途もたないまま目標数に至らず 8 例で中止となった。緊急入院 8 例の入院理由は、骨折 4 例、誤嚥性肺炎 3 例、胆嚢炎 1 例であった。入院期間は誤嚥性肺炎・胆嚢炎で長く、退院後に ADL が低下する傾向があり、退院後死亡の転機をとったケースも 1 例あった。このことから、緊急入院のケースについては特に誤嚥性肺炎・胆嚢炎等での入院の場合に、集中的な退院支援が必要であることが示唆された。緊急入院については、さらに症例を重ねて検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Motoko Kita, Reiko Yoshida.	4. 巻 2(1)
2. 論文標題 Research Trends into Support for Families Coping with Dementia in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Studies in Nursing.	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20849/ijsn.v2i1.144	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 石橋文子・北素子
2. 発表標題 病棟看護師が受けている退院支援に関する教育についての文献検討
3. 学会等名 日本看護科学学会学術集会講演集39回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 朝倉 真奈美, 赤間 美穂, 内木場 あゆみ, 北 素子, 品川 俊一郎, 中島 朋, 矢野 勝治, 泉 祐介, 八代 直子, 遠山 寛子, 杉山 友理
2. 発表標題 急性期病院における認知症高齢者の手術決定時から退院後1ヵ月のプロセス 予定入院で手術を受ける患者への認知症ケアチーム介入の効果
3. 学会等名 第19回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Motoko Kita, Manami Asakura, Miho Akama, Ayumi Uchikoba, Shunichiro Shinagawa, Hiroko Toyama, Yuri Sugiyama
2. 発表標題 The process from admission to discharge of elderly individuals with dementia in acute care hospitals: in case of scheduled admission
3. 学会等名 BIT's 5th Annual World Congress of Geriatric and Gerontology 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Motoko Kita
2. 発表標題 Problematic situations that occur during the process from admission to discharge of elderly people with dementia at acute care hospitals in Japan, and how nurses deal with these situations
3. 学会等名 IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	志村 友理 (Shimura Yuri) (30513981)	東京慈恵会医科大学・医学部・講師  (32651)	
研究分担者	品川 俊一郎 (Shinagawa Shunichirou) (90459628)	東京慈恵会医科大学・医学部・准教授  (32651)	
研究分担者	遠山 寛子 (Toyama Hiroko) (10433989)	東京慈恵会医科大学・医学部・講師  (32651)	
研究分担者	石橋 史子 (Ishibashi Fumiko) (60781622)	東京慈恵会医科大学・医学部・助教  (32651)	
研究分担者	常喜 達裕 (Jyouki Tatsuhiko) (30226378)	東京慈恵会医科大学・医学部・准教授  (32651)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------